

タスマニアで学んだこと

香川誠陵高等学校
普通科 2 年 小川 凜

私は将来動物にかかわる仕事がしたいと考えており、タスマニアの自然や動物に直接触れてみたい、また英語力の向上のためこの事業に応募しました。

タスマニアで過ごしてまず驚いたのはタスマニアの自然の豊かさです。壮大な自然が島全体に広がっており、ワラビーやインコなどの日本では見られないような野生動物が森や山などだけでなく街中やホームステイ先の家の庭、ホバートカレッジ内でも見ることができ、とても刺激的でした。

このタスマニアへの派遣を通じて、私が学んできたいと思ったことは二つあります。

一つは、ネイティブの英語に触れることです。ネイティブといっても学校などで身近なアメリカ英語とは違ってオーストラリアはいわゆるオージーイングリッシュ。聞きなじみのない発音に戸惑うことが多々ありました。さらに私の英語の発音の違いや弱点である声の小ささで伝わらないこともありましたが、ホストファミリーをはじめホバートカレッジの生徒などすべての人が伝わるまで待ってくれたり私のつたない英語にも優しく接してくれたりしたのは感謝の気持ちでいっぱいです。

二つ目はタスマニアにおける野生動物の保護についてです。

タスマニアでの取り組みについて、訪問した副市長、訪れたボノロング・ワイルドライフパークでのスタッフの方、ホストマザーに話を聞いた事や私が考えたことも含め、保護施設での取り組み、市の取り組み、生活に身近な取り組みの三点に分けてお話しします。

まず保護施設での取り組みは訪れたボノロング・ワイルドライフパークを例に挙げます。そこでは、事故やけがで傷ついた動物や、親を亡くした動物を保護・治療し、元の自然環境に戻せるよう努めています。観光客は固有の野生動物を間近で観察でき、カンガルーに触れたり、エサやりを体験したりすることもできました。一方で、タスマニアデビルやワラビーなどの多くの動物には、それぞれ自然に近い専用スペースが設けられており、観光客が立ち入ることはできません。また、24 時間 365 日、一般市民による通報が可能で、地域ぐるみの保護活動が展開されています。施設内には動物病院も併設されており、保護施設との連携体制が整えられていました。さらに、スーパーには値段の一部がタスマニアデビルの保護活動への寄付となる卵が販売されていました。ボノロング・ワイルドライフパークの活動資金もすべて入場料や募金で賄われています。動物たちの命を守るために、誰もが少しずつ関われるような仕組みがあり、環境に対する意識を育てるきっかけになることを実感しました。

副市長には、ホバート市として、取り組んでいることをお聞きしました。様々ありましたが、オーストラリアならではの感じたものを一つ紹介します。オーストラリアはペット大国といわれ、特に犬の飼育率は高いため、犬に対しても野生動物を守るための管理方法が定められているようです。国立公園や保護区などは特別な許可がない限り基本的に犬の立ち

入りが禁止されています。このような制度は、日本ではまだ一般的ではありませんが、自然環境や生物多様性を守るためには非常に理にかなったもので「ペットを大切にすること」と「自然を守ること」が両立できるよう、飼い主の責任と意識が高く保たれているのが印象的でした。

この二つを調べて、驚いたのは日本は行政が運営する保護施設が多いのに対し、タスマニアでは行政の主な役割は法やルール of 制定で実際の活動は民間のボランティアに任されていることです。これにはタスマニアの高い市民意識を感じました。

ホストマザーとは身近にある野生動物を守る取り組みについて話をしました。タスマニアは車社会のため、ロードキルによる野生動物の死亡が多いようです。そのため道路には注意の標識の数が日本と比べてとても多かったです。また、車が接近していることを音や光を出して野生動物に警告する白いポールが数多く設置されていました。

タスマニアでは日本と同じであれば、一方で全く違うような取り組みが行われていてとても興味深かったです。このテーマについて調べる中で、野生動物や自然を大切にし、誇りに思うタスマニアの人々の意識も野生動物や自然環境の保護に大きな役割を果たしているように感じました。皆さんにも自分の周りの自然環境に関心を持つという小さなことから始めてほしいと思います。

最後になりますが、今回この派遣事業に参加し、こんなにも素晴らしい経験ができたのは、支えてくださったすべての方々のおかげです。ここで学んだことは二度と体験できない貴重なもので、私にとって宝物です。この経験を生かし、これから社会で活躍する人となるよう頑張っていきます。本当にありがとうございました。



▲8月8日 薙刀を披露